Y-AIR case study, ArtCamp, International Summer School of Art, Pilsen, Czech Repblic, 2016

「ArtCampと共に、日本の取り組み・この4年間」

ArtCamp is where we speak the language of art

もくじ

1. はじめに 村田達彦（遊工房アートスペース） 2

2. 寄稿 「芸術言語で学ぶ、アートキャンプ」 レンカ・コディトゥコヴァArtCamp常任理事 3

3. 活動概要
・ArtCamp2016概要、これまでの経緯、今後の展望、学生推薦教官からのコメント 4-5

4．2016年参加者Essayなど
・受講生として参加
「言語の壁を越えた授業」 平石かなた（秋田公立美術大学4年生） 6
「アートキャンプの思い出」 王璟怡 （女子美術大学修士2年） 7
「異文化交流と自身の政策について」 森千咲（アーティスト） 8
「ArtCamp ー 多様な人々が自由に表現し、学びを得る場ーは、日本で可能か？」 小熊隆博（ギャラリー「ものかたり」） 9

・講師として参加
「アートキャンプに参加して」 矢嶋一裕（建築家、ArtCamp2016講師） 10

5. 「ArtCamp2016」調査報告書 小熊隆博（ArtCamp研究者） 11-12

- ArtCamp https://fdu.zcu.cz/en/415-artcamp-about
- Youkobo Art Space http://www.youkobo.co.jp/
- Microresidence Network http://microresidence.net

関連資料
Microresidence! 2015 Y-AIR事例集vol.1「若手作家の機会としてのアーティスト・イン・レジデンス（AIR）」2016/3発行
Microresidence!2014「若手作家の機会としてのアーティスト・イン・レジデンス(AIR)とは」―Y-AIRの可能性、欧州文化首都2015Pilsenとの試み」2015/3 発行
Y-AIR case study Part1 報告書『アートのサマースクール ArtCamp in チェコにおける日本の取組』2015/11 発行

1. はじめに

村田 達彦（遊工房アートスペース）

この記録は、チェコ共和国Pilsen市にある西ボヘミア大学で毎年夏に開催されている、アートの国際版サマースクール「ArtCamp」に、遊工房アートスペースと国内美術系大学教官(研究室)の協力を得て、学生および若手作家を派遣する実験プログラムの2016年活動報告とこれまでの経緯と将来展望についてまとめたものである。アートを介した短期滞在型異文化交流の体験機会をAIRの模擬体験の場と捉え、日本の若手作家志望の美大学生による体験を通した異文化や多様性の理解、国際感覚の理解、そして英語によるコミュニケーション能力向上チャレンジに期待する事業として始まった。

かねてより欧州文化首都への作家派遣や交換プログラムに取組んでいた遊工房アートスペースがその存在を知ったのはEUジャパン・フェスト日本委員会からだ。2013年に初めて1名の派遣から始まり、その後も関係方面の理解と支援のもと、派遣参加者は4年間で8校の学生と若手作家含め、合計20名となっている。この貴重な機会の体験事業は、当方の活動にご理解いただく美大教官諸氏の協力をベースに、EUジャパン・フェスト日本委員会、現地関係機関などの支援のもとに展開している。

この国際的でフレキシブルな公開講座への仕組みを学ぶため、2014年にはArtCamp責任者を招へいし、都内でシンポジウム・研究部会（3331千代田アーツ、女子美大・杉並キャンパス、遊工房アートスペース）を開催、参加者からの成果報告と共に、10年に及ぶArtCampの歴史と変遷などを理解・共有する場を設けた。また、2015年には、ArtCampへの受講ばかりでなく、日本人講師の参画・派遣も実現、国際的に活動するアーティスト活動への新たな道も開けた。同時に、ArtCamp活動の仕組理解のため、開催時期に合わせ、準備から実施・終了の全期間、当方からのインターン派遣が実現、Camp現場での研修の貴重な機会を得て、2016年に継続させることとなった。

現在、国内大学のグローバル化の要請は、美大にも及び、多くの美大での提携校との交換留学などの従来の展開ばかりでない、様々な試みも進んでいる中、本プログラムは、こうした背景から、広く作家志望の美大生が、異文化での創作体験機会と共に、国際的な視野を広げ、英語でのコミュニケーション能力克服のための貴重な機会となっていると確信している。こうした場への若手の自主的な参加への環境つくりのため、より広い周知の工夫、国内大学の公開講座、アートスクール、あるいは生涯学習講座などの応用・工夫で可能となる国際講座の開設など、本事業の経験を生かし、美術教育界とAIRの協働による国際化推進が期待できると考えている。

2. 「芸術言語で学ぶ、アートキャンプ」

レンカ・コディトゥコヴァ博士/アートキャンプ常任理事

ArtCampは国際的なサマー・スクール（夏期講座）で、西ボヘミア大学ラディスラフ・ストナー芸術学部（以下芸術学部）で毎年開催されています。 ArtCampは12年にわたり継続され、現在チェコ共和国で最大のサマー・スクールに成長し、美大生、アーティスト、一般の人々のための人気の高い夏期学習のプログラムとなっています。幅広いコースを提供し、毎年国際的にアーティストを講師としても招待しています。 異なる年齢、文化、国籍、興味と才能を背景とする参加者は、ユニークでモダンな大学校舎のスタジオと野外で、ピルセン市とその周辺を探索して一緒に学習をします。 ArtCamp2016は、2016年7月11〜29日に33のアート＆デザインコースを開設し380人以上の参加者を受け入れました。

国際的なプロジェクトであるArtCampは、海外のアーティストや学生を誘致し、彼らに新しい文化的、芸術的経験をもたらし、夏期の研究のために創造的かつ感動的な目的地を提供し、さらなる国際協力のためのプラットフォームを創造することを目指しています。 EU-日本フェスト日本委員会と遊工房アートスペースとの協力は、サマー・スクールの国際的な側面を強化し、参加者にとって文化的に多様な環境を作り出すために進行中のプロジェクトの1つです。 ArtCamp 2016は、日本人参加者4名と講師として、アーティスト1名を受け入れました。（このプログラムは2013年に始まり1名を派遣、2014年に10名、2015年には、5名の学生と1名の講師を派遣しました。）

今年は、日本の3校の美術大学の学生と新卒の参加1名と、アートマネージメントの研究者が参加しました。ArtCampと、その組織を研究し秋田での同様のプログラムを確立する可能性を思索する機会を得ました。彼は、コースを体験するとともに付随するプログラムに参加し、ノウハウを共有したArtCampの主催者との会合では、両国での経験が得られ今後の協力の可能性や日本の美術大学や組織とのより多くの交流がもたらされる可能性があります。

4名の日本人参加者が、それぞれ3件の1週間ずつのアートコースに参加し、それらをすべて成功裏に修了しました。コースには、アートセラピー、建築、セラミックデザイン、製本、ビデオメイキング、デジタル写真、ニューメディア、コンテンポラリーダンスのプログラムが含まれていました。彼らのArtCampの経験には、学校外での新しい友達との出会いやピルセンでの滞在を楽しむことができる多彩なプログラムに参加しました。プログラムには、アーティストのプレゼンテーション、学生の映画の夜、観光（有名なAdolf Loosインテリアのツアーを含む）、展示会のオープニングなどが含まれていました。友達を作り、若いアーティスト達がし生き生きとしていることなどを見て運営側の私たちも報われるおもいです。参加者からのフィードバックは、このような夏のプログラムに参加することにより、若いアーティストが将来の生活や創造活動にとって重要な友情と文化的経験を得ること、新しいスキルとインスピレーションを得ることなど、この経験は海外での勉強や今後の滞在プログラムへの参加のために個人の生活、意見、将来への方向性へも影響する可能性があります。さらに、日本人の参加者と出会って仕事をする可能性は、チェコ学生にとっても同様に重要で有益です。

ArtCamp（サマー・スクール）の国際的な雰囲気は参加者だけでなく、講師となる海外アーティストによっても形成されます。 ArtCamp 2016では、アメリカ、カナダ、ポーランド、スロバキアのアーティスト講師を迎え、日本からも2度目の受入となりました。 東京を拠点に活動する建築家の矢嶋一裕さんは、日本の伝統の茶屋をテーマにした1週間の建築コースを教えてくださいました。日本とヨーロッパの建築の違いや類似点を探り、茶屋の伝統的な建築原理や哲学について学び、有名なアドルフ・ロースのインテリアを訪れ、独自の茶屋モデルを表現するために伝統的な、おこし絵の紙のモデルを作る方法を学びました。 また、ArtCamp 20x20公開イベントでは、ペチャクチャ形式で建築プロジェクトを発表なさいました。

ArtCampは、芸術学部の国際関係の発展の鍵となるツールです。 ArtCampの参加により始まった日本の大学やアーティストとの交流が発展し学生や教師のモビリティ、展覧会プロジェクト、滞在型プロジェクトに於いてのアーティストなどが、相互にとって有益な協力関係がさらに発展することを願っています

ArtCampは、チェコ共和国ばかりでなく日本のような遠くの国からも人々を集めます。 距離と文化の違いにもかかわらず、私たちは多くの共通点を持っています。そして私たちは同じ言語、つまり芸術言語で話しているのです。

ピルセン、チェコ共和国　2016年8月2日

３. 活動概要

① ArtCamp2016概要

・チェコ共和国Pilsen市にある西ボヘミア大学芸術学部主催のArtCamp2016は、今回で12年目、7月11日から29日、3週間の会期で開催、日本からは、秋美、東京藝大、女子美大の協力を頂き4名のCamp受講参加者派遣、さらに1名のCamp講師派遣を実施した（講座名「Architecture, Japanese Tea House in Pilsen」）。受講者の内1名はCampの仕組み調査研究も並行して実施。ArtCamp2016会期中、1週間ごとのコースは33コース、チェコ国内外から総勢380人強の参加となった。

・日本からの参加者の受講コースは、New Media, Art Therapy, Video Making, Architecture, Photography, Contemporary Dance, Book Binding, Ceramic Designと多岐にわたる創作の体験となった。

・2016年参加者Essayなど、次項参照

②ArtCampとのこれまでの経緯

ArtCampへの取組とチェコ及びスロバキアのAIR交流・作家交換（4年間の活動推移）

<table>
<tr><td colspan="4"></td><td>2013</td><td>2014</td><td>2015</td><td>2016</td><td>備　　考</td></tr>
<tr><td rowspan="4">美大</td><td rowspan="4">ArtCamp
西ボヘミア大
(Pilsen)</td><td rowspan="3">派遣</td><td>受講生</td><td>作家 1</td><td>学生7、作家3</td><td>学生5</td><td>学生2、作家2</td><td rowspan="8">Pilsen, Czeck：欧州文化首都2015、c
Kosice, Slovakia：欧州文化首都2013、s

学生参加の協力大学は8校。
学生は学部・修士生、作家は卒業後作家として継続活動しているもの（博士含む）。

活動経費の参加者負担割合、資金支援源は、ＥＵジャパン・フェスト、文化庁、関連機関他、年毎に異なる。</td></tr>
<tr><td>講師</td><td></td><td></td><td>1</td><td>1</td></tr>
<tr><td>研究者</td><td></td><td>2</td><td>1</td><td>（1）</td></tr>
<tr><td>招聘</td><td>研究</td><td></td><td>2</td><td>—</td><td>—</td></tr>
<tr><td rowspan="2">AIR</td><td rowspan="2">Pilsen, c
/Kosice, s</td><td>派遣</td><td></td><td>1 s</td><td>2s +（1c）</td><td>1c</td><td>1s</td></tr>
<tr><td>受入</td><td></td><td>1 s</td><td>1s</td><td>1c</td><td>1s/c</td></tr>
<tr><td colspan="4">活動報告会・Forumなどの開催</td><td></td><td>3331、女子美、遊工房</td><td>さいたま、遊工房</td><td>秋美、 遊工房</td></tr>
</table>

③今後の展望

海外での夏期講座への短期滞在機会は参加者自身の貴重な体験となっていると共に、本試行に賛同頂いた大学教官を通した学内へのフィードバックなどで、ArtCamp　参加への価値が認識されてきた。参加体験の広がりと共に、現状の大学における公開講座などの仕組みも含め、美術大学のグローバル化への一手段としての国際キャンプ開催の可能性など、貴重なテーマが内在していると確信する。

④ 学生推薦教官からのコメント

志邨匠子（秋田公立美術大学　教授）
たいへん有意義なプログラムであったと考えます。多数のプログラムが用意されており、選択の段階から体験者の主体性や意欲的な参加を促しました。プログラムはいずれもレベルが高く、体験者には新鮮な刺激と自身の作品制作へのヒントを与えたと思います。また、母国語の通じない環境での創作体験や生活は、体験者が今後海外で活動するうえで貴重な体験となりました。
現時点で大学自体がコースを設立するのは困難です。なぜなら本学では40名の教員が，教育，研究，大学運営，また同時に学外の多様なプロジェクトを企画・運営しており，まったく余裕がない状態だからです。しかしアートキャンプ（もしくはそれに類する講座やスクール）の仕組み自体は大学が中心となって作り，それを県や市といった自治体や NPO法人などが運営し，　本学教員がコースの講師として関わることは可能だと思います。現在，本学の国際交流委員会はその仕組み作りをしようとしている段階です。

日沼禎子（女子美術大学　准教授）
学術研究の分野での助成、或いは、草の根国際交流などでのファンドの可能性を研究し、参加者への一部サポートの仕組みを継続できれば、参加する学生、若手アーティストの経験の場も広がっていくと考える。また、そのためには、成果発表・発信方法についても検討、発展させる必要があると考る。海外AIR、大学連携は、これからの国際化の重要な要素になって行くと考える。
日本では、狭い国土の中に多くの美術大学が存在し、また少子化による大学運営に危機感をもって各大学が運営している中、１つの大学だけ独立的に行い、１つの機関の成果とするのではなく、芸術関係機関とも連携しながら、美術教育の意義を問い、ともに才能を伸ばす環境、今後のキャリア形成について議論し、社会的インパクトをつくっていくことが今後ますます重要になると考える。

OJUN（東京芸術大学　教授）
それぞれ専門の制作があるだろうが、場所や向かい合う人を変えて、自分が普段やっているところから少し遠いところに手を伸ばして経験できるこのArtCampの取り組みはいいことだと思う。 しかもそれが既に10年目。一区切りに10年と言ってもそれを毎年続けて行くというのはその努力やそれに賛同する若い人たちの情熱がないと続かないわけで、これからますます展開が楽しみだ。

４. 2016年参加者Essayなど
「言語の壁を超えた授業」

平石かなた（秋田公立美術大学 アーツ&ルーツ専攻 4年生）

　渡航前は授業は理解できるだろうか、友達はできるだろうかと緊張し、とても心配していた。しかし実際に参加してみると、クラスの生徒と交流ができ、授業も非常に興味深いものだった。英語でおこなわれるのクラスを受講したので、時々言葉の面で苦労したことはあったが、工夫しながらコミュニケーションをとることができた。チェコ人はもちろんのこと、他の東ヨーロッパの国々の人達と交流ができ、視野を広げることができたたことは貴重な体験であった。

　アートキャンプでは私が通っている大学にはない多くのユニークな授業が開講され、週末の発表を見て、どれも参加してみたいと感じた。発表された作品も日本にはない独特の表現があり、とても新鮮であった。

　私が受講した３つの授業はそれぞれ特徴があった。一週目の建築の授業は、自分の制作に加え他者との意見交換があった。建築物のペーパーモデルとスケッチを使い、自分の作品のプレゼンテーションをした。どのようなシーンで、誰と過ごす場なのか、建築物のアイデアの背景を伝える。伝える難しさといかに視覚情報が言語の壁を超えられるかを知った。二週目の製本の授業では、ひたすら個人の作業に集中し、主に先生に手法を教えてもらう形だった。非常に技術的な内容が多かったので言葉で説明することが難しい時は、先生が実際にお手本を見せてくれた。できあがった本は本格的で、新しい技術を得たことが嬉しかった。三週目はコンテンポラリーダンスで、身体を動かして伝えるという今までに体験したことがない方法だった。感情や音のイメージ、また水や山の上といった環境の中にいるイメージを体の動きで表す。時折擬音語などを用いるが、言葉はほとんど使わなかった。最終発表は参加者個々の表現を融合させた１つの作品になり、ダンスの楽しさと達成感を覚えた。いずれにせよ言語、動き、形に表すなど様々な手法でコミュニケーションを図ることが必要であり、良いトレーニングとなった。渡航前はただ英語が通じるだろうかと不安だったが、人とコミュニケーションをとるのは言語だけでは無いことを実感した。

　アートキャンプの主な目的は作品を作ることかもしれない。しかし私の収穫は、アートの授業を通じ、現地で人々と交流ができたことであった。時折チェコ語のみの説明がある場面があったが、視覚的なアートは言葉がわからなくても伝わる。授業中の何気ない会話の中でわからない言葉がある時、絵を描いて伝えたり、ジェスチャーをしたり、不自由な状況の中でこそできる作品作りであった。特にコンテンポラリーダンスはその典型であり、先生自身は英語が特別流暢なわけではないかったが、身体表現をうまく利用した授業の組み立て方であった。これから私は教職課程の一環で中学校に教育実習に行くので、初めて接する生徒たちに、アートキャンプから学んだわかりやすい授業を実践したい。日本で受けた教育とは異なるアートキャンプでの体験を、教育において生かしていきたい。

「アートキャンプの思い出」

王璟怡（女子美術大学 アートプロデュース修士2年）

この度、アートキャンプ2016に参加させていただいて、本当に感謝しています。いろいろ勉強になりました。

出発する前に、すごくドキドキしました。なぜなら、初めてヨーロッパへの旅でした。自分が日本に留学しているので、多分、海外生活は慣れているから心配する理由は一つでもないと思いました。実は全然違いました。

チェコリパブリックはどういう国なのか、どんな言語を使われているのかも知らずに、自分の英語力もそんなに自信がないのに、3週間の授業はちゃんと聞き取れるかなって自分が自分に質問しました。出発する前にすごく緊張しました。逆に、本当に羽田空港から出発した時に、興奮しかありませんでした。いまから考えると、あの時は不思議でした。プルゼニに着いた時に、バスを乗り間違え、ドライバーも英語が通じないみたいで、ホラー映画のシーンが頭のなかに浮かんで、ここに死ぬかなと思いながら、涙も出るぐらい怖かったです。いまは当時の気持ちを思い出して本当にバカだねと思っています。最後、無事にホテルに着きました。やっと安心しました。

第一週目の授業は日本建築を取りました。一緒に授業を受けるクラスメートみんなはそれぞれの国からアートキャンプに参加したみたいです。ベラルーシやスロバキア、地元の人も参加しています。自分が建築に対する知識はゼロと言っても過言過ぎないと思います。　でも授業を受けながら、少しずつ空間と人間の関係を考えていました。そして、建築という新しい世界をはじめて手触れました。授業が終わったあと、みんな一緒にビールを飲みに行きました。地元の友達がプルゼニビールのできるまでのステップも教えてもらいました。文化が違うだけど、共通なものがあることを嬉しかったです。

フォトグラフィーの授業はほとんどみんなと一緒に野外に行くことが多かった記憶がしています。廃棄された工場やきれいな湖、汚いところでも綺麗なところでも美しいが見つけます。

最後のコンテンポラリーダンスの授業は一番印象が残っています。なぜコンテンポラリーダンスの授業を取るというと、身体表現の勉強はアートに対する理解が深めることができると思うから。この授業を受ける人がそれぞれの経験があります。ある人がアルゼンチンタンゴを学んだことがあって、ある人はバレをやったことがあります。全然経験がない人ももちろんいます。こういうレベルがバラバラなクラスでも最後発表する時に十分ぐらいのパフォーマンスを完成しました。本当に良い経験になりました。コンテンポラリーダンスは身体や私たち依存している空間との関連性に対する思考だと思います。ダンスより哲学のほうが似ていると感じました。身体は彫刻のような動き、空間とまわりの人とのバランス、世間万物のまねなど、コンテンポラリーダンスの中に体験してみました。今度三週間の授業本当に楽しくて、終わる時にまだ足りないと感じました。とってもいい経験になりました。参加した良かったです。最後、女子美大学や遊工房と西ボヘミヤ大学に感謝します。チャンスを与えてくれたありがどうございました。

「異文化交流と自身の制作について」

森千咲（アーティスト）

今まで、東京と金沢を拠点に制作および、それにまつわる研究を行ってきました。このプログラムによりチェコ共和国という異文化の地で活動する事は、今までの活動や、自分の制作にまつわる信念のようなものを一つずつ試されているような３週間でした。

このプロジェクトは、大学に実際留学するのとは違い、１週間という期間にどれだけ集中してコミュニケーションを取り、どれだけクオリティの高い作品を制作できるかという緊張感がありました。それは、より密に会話をして、受講者同士仲良くならないと楽しめないことでもあります。そのため、全体を通して受講者の方々は、会話や交流に積極的に取り組み、授業を楽しんでいました。最初にスケジュールを聞いた際には、１週間という期間でどれだけのことが出来るか不安もありましたが、実際に取り組んでみると、この期間は最適であったと思いました。それぞれが良い緊張感を保ったまま授業が進み、最後には別れ惜しくなっていました。１週間ごとに新しい人と出会い、新しい素材に触れていたので、３週間はあっとう間に過ぎてしまいました。特に、高校生や私より年齢の若い受講者も多かったのですが、些細な事にとらわれるず、純粋に自分の表現したい事に強い信念を持っていたように思います。

他大学の授業を体験するという点においても、有意義でした。特にこの大学は総合大学ということもあり、生徒数も多く、開放的な印象を受けました。街自体はプラハから離れた小さい所ですが、大学で授業を受けているとそんな事を忘れてしまうくらい、自由で開け放たれた印象を受けました。プルゼニという街自体も、EUのEuropean Capital of Cultureに選ばれた年に大幅に設備が整えられ、メイン会場であったDEPOは、同じコースの生徒が展示を行う等、今現在も広く機能していました。これからも街全体が芸術活動に深く携わっていけたら素晴らしい事だと思います。

週毎の成果発表では、他のコースの生徒の作品を鑑賞する機会があり、他の授業では何が行われているのか把握する事ができました。また、その発表を通して他のコースの方とも話す機会を持つ事もできました。その中で様子を見ていると、アニメーションやコミックといった分野が人気で、特にアニメーションの作品では、レベルの高さに驚きました。今回のArtCampは過去にも行われていた事もあり、参加者の中にも受講が初めてではない方も数名いらっしゃいました。また、殆どの参加者は１週間だけという短い参加でしたが、中には２．３週続けて授業を取っている方もいました。その殆どが、美術に興味がある高校生でした。この取り組みは、国外からの参加者にとっては異文化交流といった新しい地での刺激的な経験という意味で大きな意義があり、現地の方々にとっては、大学に入る前の経験やリサーチといった意味合いのあるプロジェクトであると感じました。その双方が同じ授業に参加できる事は、ただの体験入学というだけでなく、さらに視野を広げたクラウド的な要素の強い面白いシステムになっていると感じました。私自身の反省点としては、もしチェコ語を話す事が出来たらより専門的な活動も可能であっただろう事が残念です。

そして、今回のArtCampで出会った人とこれからも縁長く続いていけたらと思っています。

「ArtCamp―多様な人々が自由に表現し、学びを得る場―は、日本で可能か？」

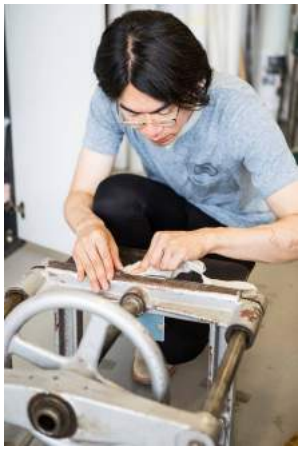
小熊博隆（ギャラリー「ものかたり」）

2005年より西ボヘミア大学の造形芸術学部（Faculty of Design and Art、以下FDA）が主催する国際サマースクール「ArtCamp2016」に、企画のマネジメント調査という目的で、学外の立場ながら、遊工房アートスペース（以下、遊工房）の推薦を得て参加させていただいた。
遊工房では2013年より都内の美術系大学に通う学生を派遣している。日本国内でのArtCamp開催という構想実現に向け、作家を志望する学生だけでなく、アートマネジメント分野を志向する、または実務に携わる人材へも対象が拡がり、今回初めて募集がかかった秋田公立美術大学を通じて応募するにいたった。

大学の位置するチェコ西部プルゼニ市は、中心部に旧市街地の街並みを残しながら、郊外では外国企業―日本ではダイキンやパナソニックなど―が自社工場を構える、外資により成長を続けるチェコ第４の都市と呼ばれる。FDAでは、ベネチアングラスのような伝統工芸よりもむしろ現代的な意匠・表現を学ぶ場を提供し、例えば自動車メーカーに車体デザインを提供するなど地域での役割の担う一方で、ArtCamp開催によりその存在感を国内外にアピールしている。

ArtCampは、国内外の学生とFDA入学志望者・一般参加者が同様のコースを受講できる、制作スケジュールがあるとはいえ各自で選択できる機会が多い、など、開放的で自由度が高いと感じる点が多かった。制作中、講師から助言や提案を受けることがあるが、たとえ助言に沿わない選択をしても「あなたのためのキャンプだから何も問題ない」と受け容れられたのが印象的であった。
ArtCampに参加して、あるいはFDA事務局担当者へのヒアリングから俯瞰して、他にも特徴的と思われた点を挙げてみる。

・受講者は、知識や経験の有無を問わず、約30あるコースを基本的に自由に選択できる（ただし開講期間が異なる、使用言語が限られる、編集ソフトなどの使用能力が必要、といった場合もある）。3週間フル参加or1週間のみ参加も選択可能。
・各コースは1週間単位で実施される。事務局によれば、過去には２～3日間のみ、あるいは1週間を超えて行われるコースもあったが、受講者の満足感・負担感を鑑みると1週間が最良とのこと。
・各コース最終日（毎週金曜日）の午後、学内では成果展が開催され、講師から修了証書が授与される。受講者が成果を実感できる仕組みが用意されている。なお、ArtCampはプルゼニ市から生涯学習認定を受けており、修了証書はその証明でもある。



本企画は、学長によるアートディレクションを軸に、開講当初から同じ体制で運営の改善に取り組んでいるという。前年のフィードバックをコース内容や講師の招聘に反映させやすく、大学のプロモーションという企画の位置付けを一貫しやすい状況と言えるであろう。
このような大学のリーダーシップは、日本国内では期待しにくいが、もし大学と民間が共同で企画を推進すれば、実現可能性は高まるのではないか。とくに地方大学の場合、西ボヘミア大学のように将来の学生や教授だけでなく地域に対する広報力が求められている。民間と協働し、地域性を加味したArtCampなどが開催できれば、その独自性を外部に強く発信できると考えられる。

「アートキャンプに参加して」

矢嶋一裕（建築家）

講師として参加したアートキャンプでは大変充実した時間を過ごすことができた。これもアートキャンプに参加する機会をつくってくださった西ボヘミア大学と遊工房、EU・ジャパンフェスト日本委員会のおかげである。この場をお借りして感謝を申し上げたい。また、アートキャンプのオペレーションは完璧で何の不都合もなく私のコースを実行することが出来た。これは私の力ではなく、４年目を迎える西ボヘミア大学と遊工房、EU・ジャパンフェスト日本委員会との協働の蓄積の結果である。

しかし、準備が順調に進んだわけではなかった。日本の建築や都市空間から独自の視点をピックアップし、それを私のコースに盛り込むことが期待されていたからである。この期待に答える困難さは、学生が日本の建築や都市空間を実際に体験できないところにあった。私が日本から身ひとつでプルゼニに乗り込み、果たしてその期待に答えられるだろうか？

そんなことを考えていると、茶室とおこし絵というアイディアに辿り着いた。茶室は主人と客が「一期一会」の機会を通して心を通わせるというコミュケーション空間である。その茶室を表現するためのおこし絵は紙の折り畳み式建築模型である。茶室とそれを表現したおこし絵を使えば、日本で独自に発展した茶文化や茶室の本質を提示できるのではないかと考えたのである。

建築や都市空間を理解するには、実際に体験することが重要である。眼や頭だけではなく身体を通して空間を理解する必要がある。そこで、プルゼニにあるアドルフ・ロース設計の優れたインテリア空間に着目した。その空間を学生達と訪れ、その空間をおこし絵として表現するところから私のコースを始めることにした。

次に、学生達は茶室を参考に、主人と客のためのコミュケーション空間をプルゼニの公共空間にデザインするプロジェクトに取り組んだ。そして最後に、おこし絵を使ってプレゼンテーションしてもらうことにした。

学生達は、空間をデザインする経験がこれまでなかったようだが、楽しそうに作業してくれた。真面目な学生ばかりでこちらも楽しい時間を共に過ごすことができた。

学生作品の中でベラルーシ出身のアリーナさんの作品に注目したい。彼女のアプローチは他の学生と違い、紙そのものの特徴を生かした作品であった。折り重なった紙が、ドアを開けるように開き空間がつくられていく。実際に幅１m高さ２mを基本としたドアを意識した寸法で、とてもシンプルな案だが多様な展開可能性がある。そして模型が美しく印象に残った。

5. 「ArtCamp 2016」調査報告書

調査者：小熊隆博
調査期間：2016年7月11日（月）より7月29日（金）まで
調査地：チェコ共和国プルゼニ市、西ボヘミア大学、Ladislav Sutnar Faculty of Design and Art

調査の目的と概要：
西ボヘミア大学（以下、UWB）では、2005年より毎夏、アートのためのインターナショナル・サマースクール「ArtCamp」を開催している。UWB学部生だけでなく、美術系大学の進学を希望する高校生や美術・デザインに関心を持つ一般市民も受講できるという点がユニークで、参加希望者は、1週間単位で開設される多種多様なコースを選択し、最長で3週間、各自の制作に励む。
日本からは2013年より、制作に携わる学生など16名、講師1名、インターン1名を派遣してきた経緯が既にあり、企画の枠組み理解に関する調査は蓄積されつつある*。今回は、日本国内でのアートキャンプ開催実現を見据えた場合の、運営の仕組み理解に関する調査を試みた。

調査内容：
今回は専任の調査員ではなく、受講者枠での参加である。期間中、以下のコースを受講しつつ、他コースの視察、レンカ・コディトゥコヴァ氏（Art Campエグゼクティブディレクター）およびマルケタ・コフトコヴァ氏（同コーディネーター）へのヒアリングを実施した。
第１週：セラミックデザイン、第２週：ブックバインディング、第３週　ヴィデオメイキング

１．コース毎の運営について
Art Campの参加希望者は、事前にUWBウエブサイト上のシラバスを参考に受講コースを選択するが、希望した講座が定員に達した場合は他への調整が必要になる。いずれのコースも、定員は講師1名で個々の制作に目が届く、10名未満を想定しているように見受けられた。例えば筆者が第2週に受講したブック～コースでは、チェコ語の受講生8名、国内の高校生および筆者ら他言語の受講者6名を、教授・助手が分担して指導した。
ゼミナール形式とも言えるコース毎の運営は、基本スケジュールの範囲で講師に委ねられる。初心者向けに制作のノウハウから備品まで完備している場合があれば、経験者向けに制作の前提知識・技能を求める場合もある。制作のペースについても、受講者に委ねられる場合、予め講師側が作り込む場合など多様である。
また、制作する作品数についても定めがあるわけではない。制作過程が理解できれば何点でも制作できる場合、編集作業などを経て一点を制作する場合、がある。

２．コース毎に得られる成果
関心のレベルが様々に異なる参加者が集うプログラムにおいて、それぞれの成果が何に見出されるかは重要であろう。Art Campにおいて、その成果は3つあると考えられる。一つ目は、制作を専攻する学生や若手作家にとって、アーティスト・デザイナーとして活躍する国内外のゲスト講師に指導を受ける機

会そのものがあげられる。二つ目は、コースを修了するごとに授与される修了証明書（Certificate of Attendance）である。Art Campは生涯学習プログラムとして公的な認定を受けており、上記はその証明書でもある。とりわけ一般参加者にとって有意義を感じやすい制度である。三つ目は、各コース最終日に学内で開催される成果展である。それぞれに制作した作品がフロア内に展示され、他コースの受講生や外部の参観者が自由に鑑賞する２時間程度の展覧会で、講評や授賞があるわけではないが、自身の成果を実感できる機会である。

３．マネジメント体制

Art　Camp期間中は、週によっては10コースを超えて講座が運営され、毎週100名程度の受講者及び関係者が大学内施設を使用することになる。企画全体の運営のためにそれなりの規模の事務局組織を想像したが、レンカ氏によると、両氏を含め数名の企画運営スタッフ、現場運営・記録担当の学生スタッフで運営を賄うという。学生スタッフを交えての全体会議は期間を通じて２回程度、あとは連絡・報告事項などある際に学生スタッフが適宜コンタクトを取るにとどまり、事務局のガバナンス機能は小さい。上記のように、各コースの運営はまさに講師の裁量に委ねられる。ただし、この「講師の裁量」には、講座の方針の違いや講師の指導力が反映されてしまうという点で良し悪しもある、とレンカ氏は付け加えていた。なお、レンカ氏とマルケタ氏、Art Campディレクターを務める学部長は、2005年のArt　Camp開講当初からの核メンバーであり、企画の大枠はこの三者によって決定、運営されていると言ってよく、毎年のフィードバックが翌年の進化・改善に反映されやすい体制が継続している。

４．予算収支について

Art Campは、設立してまだ10年ほどのUWB、Ladislav Sutnar Faculty Of Design And Art（デザイン＆アート学部）にとって学部のプロモーションやマーケティングを担う戦略的な主催事業であり、学内予算が組まれている。全体の費用に対してはおよそ半分を賄い、残り半分は受講費や生涯学習認定にかかる自治体の助成などによってカバーされるという。学内設備や備品を活用することで費用は軽減されながらも、学外との継続的なパートナーシップが不可欠である。

５．調査を終えて

日本でも国際アートキャンプを開催するとすれば、UWBにとって本プログラムがマーケティングツールと位置付けられるように、実施主体にとっての意義を見出すことが言うまでもなく重要になるが、今回はその議論をしばし置き、プログラムを実際に運営するにあたり必須と思われる観点から調査を試みた。レンカ氏はヒアリングのなかで、日本でArt　Campを実施する場合、レベルとサイズを決める必要があるとコメントしてくれた。前者は学生、作家、一般市民といった対象に対し、誰がどのような成果を得ることを期待するのかという、プログラム実施の意義に関わる問いかけであり、後者は大学かあるいは民間でも担える規模で始めるのかという、実施主体に関わる問いであるといえる。確かに5コース20名程度でスタートしたArt Campの当初を振り返れば、民間で担えない規模ではない。ねらいを確立し、実現可能な規模から始めると考えれば、現在の議論の枠組みを一つ拡げることができるのではないか。

*本調査および報告書の作成に先立っては、以下の資料を参考にした。

・『MICRORESIDENCE!2014　若手作家への機会と場としてのアーティスト・イン、レジデンス（AIR）とは　Y-AIRの可能性、欧州文化首都2015Pilsenとの試み』

・報告書『アートのサマースクールArtCamp in チェコにおける日本の取組』